

これは、二枚の スライド です。

青い スライドです。

この スライドは、

谷川の 底を うつして います。

ここは、

小さな 谷川です。

一 五月 一まいめは、五月の 話です。

かにの 子どもが、二ひき います。

かにの 子どもたちは、

水の 底に います。

水の 底は、青白いです。

かにの 子どもたちは、話して いました。

「クラムボンは

わらったよ。」

「クラムボンは

かぶかぶ わらったよ。」

「クラムボンは

はねて わらったよ。」

「クラムボンは

かぶかぶ わらったよ。」

上の方や よこの方は、

青く

くらく

はがねのようです。

その 天井は、なめらかです。

あわが、

天井を ながれていきます。

あわは、つぶつぶです。

「クラムボンは

わらっていたよ。」

「クラムボンは

かぶかぶ わらったよ。」

「なぜ クラムボンは わらったの。」

「知らない。」

つぶつぶ あわが、ながれて いきます。
かにの 子どもたちも、

あわを はきました。

あわは、

水銀のように 光って いました。

あわは、

上の方へ 行きました。

一ぴきの 魚が、

頭の上を つうと 通りました。

魚は、

銀の はらを

ひるがえして 行きました。

「クラムボンは しんだよ。」

「クラムボンは ころされたよ。」

「クラムボンは しんで しまったよ……。」「

ころされたよ。」

「なぜ ころされたの。」

「分からない。」

魚が、

また

つうと もどって きました。

魚は、

川下の方へ 行きました。

「クラムボンは わらったよ。」

「わらった。」

水の 中が、

きゆうに

ぱっと

明るく なりました。

日光が、

水の 中に さしこみました。

日光は、

金色で、

ゆめのように うつくしいです。

波が、

川の そこに

光の あみを つくりました。



光の あみは、
ゆらゆら

のびたり
ちちんだり しました。

とても うつくしいです。

あわや

小さなごみから、

かげの ぼうが できました。

かげの ぼうは、

水の中

に ならんで 立ちました。

また

魚が、

上の方へ 行きました。

そのとき、

魚は

そこらじゅうの 黄金の 光を

くちやくちやに しました。

魚の 体は、

鉄のように 光って いました。

「お魚は、

なぜ 行ったり 来たり するの。」

弟の かにが、たずねました。

弟の かにに、

まぶしそうに

目を うごかして いました。

「お魚は、

何か 悪いことを してるんだよ。

何かを とってるんだよ。」

「どってるの。」

「うん。」

その お魚が、

また

上から

もどって きました。

その お魚は、

ひれも

おも

うごかしません。

その お魚は、

水に ながされて きました。

お口を わのように 円く して います。

お魚の

かげが、

光の あみの 上を

すべりました。

かげは、

黒く

しずかに すべりました。

「お魚は……」

そのときです。

天井に

白い あわが 立ちました。

そして、

青く

きらきらした ものが、

とびこんで きました。

その 青い ものの 先は、

コンパスのように とがって いました。

魚の 白い はらは、

ぎらっと 光りました。

そして、

魚は

いっぺん ひるがえりました。

魚は、

水の上の方へ 行きました。

もう

青いものも

魚も 見えません。

光の 黄金の あみは

ゆらゆら ゆれました。

あわは

つぶつぶ 流れました。

二ひきは

声も ありません。

二ひきは

こわくて うごくことが できませんでした。

お父さんの かにが

出てきました。

「どうしたんだい。
なぜ

ぶるぶる ふるえて いるんだい。」

「お父さん、

今、へんなものが きたよ。」

「どんな ものだ。」

「青くて、

光るんだよ。

さきが 黒く とがっているの。

それが 来たら、

お魚が 上へ いったよ。」

「そいつの 目が 赤かったかい。」

「分らない。」

「ふうん。

そいつは 鳥だよ。

かわせみと いうんだ。

だいじょうぶだ。

安心しろ。」

「お父さん、

お魚は どこへ 行つたの。」

「魚かい。

魚は、こわい 所へ 行つた。」

「こわいよ、お父さん。」

「いい、いい、だいじょうぶだ。

心配するな。

そら、かばの花が 流れてきた。

見てごらん、きれいだろう。」

白い かばの花が、

天井を たくさん ながれて きました。

あわと いっしょに ながれて きました。

「こわいよ、お父さん。」

弟の かにも 言いました。

光の あみは、

ゆらゆら、

のびたり ちぢんだり して いました。

花びらの

かげは、
しずかに 砂の 上を すべりました。

二 十二月 二まいめは 十二月の 話です。

かにの 子どもたちは、
とても大きくなりました。

川の 底も
夏から 秋のあいだに
すっかり かわりました。

白い 丸石も
ころがつて きました。

水晶の つぶや
金雲母の かけらも、
ながれて きて 止まりました。

水は つめたいです。
月光は、

水の 底まで
とどいて います。

月光は、
ラムネの びんのような 色です。
天井で、

波が
青白い 火を
もやしたり
けしたり しています。

あたりは、
しんと して います。
波の 音だけが
遠くから 聞こえて きます。

月が
とても 明るかったです。

水も
とても きれいでした。
それで、

かにの 子どもたちは、
ねないで 外に 出ていました。
かにの 子どもたちは、
だまって、あわを はいて いました。
そして、



天井の方を見ていました。

「やっぱり

ぼくの あわは 大きいね。」

「兄さんは、

わざと 大きく はいてるんだ。

わざとだったら

ぼくも、もつと 大きく はけるよ。」

「はいてごらん。

おや、たった それだけ。

じゃあ、

兄さんが はくよ。

よく 見ていて。

そら、ね、

大きいだろう。」

「大きくないよ。

同じだよ。」

「近くだから、

自分の あわが

大きく 見えるんだよ。

じゃあ、

いっしょに はいてみよう。

いいかい、そら。」

「やっぱり、

ぼくの あわが 大きいよ。」

「本当かい。

じゃ、もう一つ はくよ。」

「だめだよ、

そんなに のびあがっては。」

また、お父さんの かにが 出てきました。

「もう ねろ ねろ。

おそいぞ。

あした イサドへ つれて いかないぞ。」

「お父さん、

ぼくたちの あわは、

どっちが 大きいの。」

「お兄さんの ほうだろう。」

弟の かに

には なきそうでした。

そのとき、
トブン。

黒い
丸い

大きなものが、

天井から おちて きました。

それは、

川の 底に しずみました。

そして、

また 上へ 行きました。

きらきらつと

金色に 光りました。

「かわせみだ。」

子どもたちは、

首を すくめて 言いました。

お父さんの には、

遠めがねのような 両方の 目を

おもいつきり のばしました。

そして、よく見て、言いました。

「そうじゃない。」

あれは やまなしだ。

ながれて いくぞ。

行ってみよう。

ああ、いいにおいだな。」

水の 中は、

やまなしの いい においで いっぱいでした。

やまなしは、

ぼかぼか

ながれて いきました。

三びきは、

やまなしの 後を おいました。

三びきの かげも

後を おいました。

合わせて 六つは、

やまなしの 円い かげを おいました。

水は

サラサラ 鳴って います。

天井の 波は

青い ほのおを

あげて います。

間もなく、

やまなしは

木の えだに

引つかかって 止まりました。

その 上には、

月光が あつまりました。

「やっぱり やまなしだよ。

よく じゅくしている。

いい においだろう。」

「おいしそうだね、お父さん。」

「まて まて。

もう 二日ほど まちなさい。

すると、

やまなしは

下へ しずんで くる。

それから、

ひとりでに

おいしい おさけが できるんだよ。

さあ、 もう 帰って ねよう。

おいで。」

親子の かには、

自分たちの あなに 帰って いきます。

波は、

青白い ほのおを

ゆらゆらと あげました。

波は、

ダイヤモンドの 粉を

はいて いるようでした。

わたしの スライド（幻灯）は、

これで おわりです。